生命健康科学研究所紀要、第１３号の発刊によせて

生命健康科学研究所 所長　　古川鋼一

生命健康科学研究所紀要、第１３号の発刊に際して、ひとことご挨拶を申し上げます。本研究所は、2004 年 6 月に設置されて、もう１３年になろうとしております。生命健康科学部よりも先に設置されて、学部創設の生みの親になったとのこと、感慨深いものがあります。この１０年間以上を、紆余曲折がありながらも存在感を増しながら継続・発展してきたこと、ひとえに研究所を支えていただいた先生方や大学関係者の皆様のご尽力、ご協力の賜物と、心より感謝申し上げます。

本研究所は、病気を予知･予防し、病気にならず、健康･長寿を享受し全うできる生活を目指した「21 世紀の健康を科学する研究所」として活動を進めて参りました。超高齢化社会を迎えつつある現在、「よりよく生きる」ことの実現に向けて、ライフサイエンスに立脚した新しい開発型科学技術の創成を目指してきました。今や国民の半分が罹患する悪性腫瘍や認知症に代表される増加する神経・精神疾患、あるいは糖尿病などの生活習慣病や新型感染症など、現代の健康障害と様々な疾病を対象にして、その発症・進展機構の解明、予防と治療法の開発、および看護と介護のための新たな医療・看護技術等の開発と教育システムの開発のための研究を推進しています。

本研究所では、この 10 年間に二つの大型企画が文科省等により採用され、大型研究プロジェクトとして展開しました。一つは、平成 20 年に文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として採択された『生活環境因子誘発性疾患の予知･予防に関する戦略的研究』であり、そのプロジェクトは独立した研究センター“ヘルスサイエンスヒルズ”として新たに展開中です。ここでは、慢性炎症の遷延から悪性腫瘍や神経変性症などの難治疾患への進展過程の解明と先制予防に焦点化して、平成 28 年度から始まった Branding 事業の研究提案を行いました。もう一つは、地域医療の問題点追及、高齢者の心身病態の追求、障害者や在宅医療を支援する医療機器、介護器具、携帯治療･診断機器の開発などに関する研究をふまえて、平成 25 年度に採択された文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業)」の一環で、「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」であります。この事業では、本学と春日井市が連携し、大学の持つ人材や技術、知の資産を活用して地域再生・地域活性化に取り組んでいます。

現在、本研究所は、メディカルエンジニアリングリサーチ部門（臨床工学科中心)、一次予防教育研究部門（スポーツ保健医療学科中心)、ヘルスサイエンスヒルズ部門（生命医科学科中心)、保健看護学領域部門（保健看護学科中心）から成り、それぞれの部門が相互に連携を図りながら、若手研究者の育成、大学院学生の研究支援とともに、新規の大型プロジェクト獲得に向けて基礎研究に邁進しているところです。

さらに、本研究所は、生物機能開発研究所との共催による「中部大学ライフサイエンス

フォーラム」を例年企画し、生命・健康科学の進歩について広く最新の知見を提供しております。本年度は１１月２３日に第１１回のフォーラムを開催し、大阪大学微生物病研究所の伊川正人教授に「ゲノム編集技術の進歩と課題」というタイトルで、エキサイテイングなお話をしていただきました。また、同時に講演をお願いしました京都女子大学家政学部の八田 一先生には、「卵の研究は面白い—Oh! Eggciting—」というテーマで講演をしていただき、期せずして、両方のご講演が卵と受精卵の本質に触れる興味深い内容となりました。250 名近くの参加者があり、質問が山のように出るなど、多くの学生、研究者が強く刺激を受け触発されました。ご講演の内容の一部を紀要に掲載しております。

以上、述べてきた本研究所の活動実績をふりかえりますと、この研究所が生命健康科学部の研究を牽引する拠点となってきたことが如実に示されている様に思われます。とくに、今後、生命健康科学部の研究推進及び若手研究者や大学院生の育成の場として、様々な形で貢献していくことが、研究所の重要な使命となっていくものと感じております。また、これらの研究活動の学内外への紹介・発信の一助とするために、この紀要がお役に立てばと願うものであります。

多くの方々にご高覧いただき、今後の本研究所の活動にご助言と一層のご支援をいただきますようお願い申し上げます。